第2部　戦争体験の記録

第2部 戦争体験の記録

昭和20（1945）年の夏から、80年。戦前から戦中、そして戦後へと至る時代に、人々は何を感じてどう動き、どのように生き抜いたのでしょうか。当時を体験した11人の方々に、港区の〈平和青年団〉や〈港区平和都市宣言40周年事業実行委員会〉の高校生や大学生、大学院生たちがお話を伺いました。

戦争体験者の方々

いつでも白いご飯を
好きなだけ食べられる
そんな幸せなことって
ないんですよ

P.140
中嶋房子 さん
（なかじま・ふさこ）

負けることを
予想していた軍の内部
豊富に蓄えられていた
物資を
将校たちは要領よく
持ち帰っていった

P.100
可児 忍 さん
（かに・しのぶ）

焼き払われた
自宅の跡に
シンクとジャムの
缶だけが
残ってました

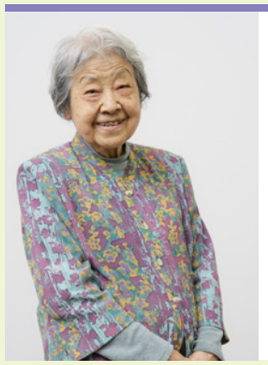
P.150
中西寿一 さん
（なかにし・じゅいち）

手縫いのグローブで
白球を追う
焼け跡の野球少年

P.110
河村弘一 さん
（かわむら・こういち）

疎開したのに栄養失調
「迎えに来て」と
書いたはがきは
検閲で没収されました

P.70
池田林太郎 さん
（いけだ・りんたろう）



川へ向かうか、
山へ向かうか
燃えさかる下町を
逃げながら
それが命の分かれ道と
なりました

P.160
廣瀬房代 さん
（ひろせ・ふさよ）

まわりで燃える
焼夷弾（しょういだん）の火を
端からスコップで
叩いて
一生懸命に消しました

P.120
髙橋雅雄 さん
（たかはし・まさお）

「日本は負けるぞ」と
諭す兄に
「いざとなったら
神風が吹く」と
僕は言い返したのです

P.80
泉 宏 さん
（いずみ・ひろし）

もっと数学を
勉強したい!
せっかく進学した
東京での学びは、
戦争で
絶たれたけれど……

P.170
森 信子 さん
（もり・のぶこ）

芋で作った飴（あめ）を運び
闇市の問屋で
売りさばいたお金で
家族みんなが
生き抜いたんです

P.130
武 恒雄 さん
（たけ・つねお）

「なぜこんな死に方を
しなくては
ならないんだろう」
大量の焼けた遺体に
呆然（ぼうぜん）としました

P.90
井上 繁 さん
（いのうえ・しげる）

インタビュアー ● 港区平和青年団

P.110
辻 孝太朗 さん
（つじ・こうたろう）

P.150
古山 智 さん
（こやま・とも）

P.160, 170
亀田知沙 さん
（かめだ・ちさ）

P.70, 130
藤田睦月 さん
（ふじた・むつき）

P.80, 160, 170
田中陽暖 さん
（たなか・ひなた）

P.120
小林洋太 さん
（こばやし・ようた）

インタビュアー ● 港区平和都市宣言40周年事業実行委員

P.120
佐藤 碧 さん
（さとう・あおい）

P.70
金光美早紀 さん
（かねみつ・みさき）

P.70
上野七海 さん
（うえの・ななみ）

P.100
清水亜桜 さん
（しみず・あお）

P.90, 160
鹿又大輔 さん
（かのまた・だいすけ）

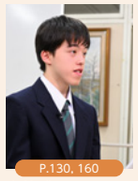
P.80, 100
大橋樹亜良 さん
（おおはし・きあら）

P.140
船本知愛 さん
（ふなもと・ちいな）

P.110, 170
小松尚平 さん
（こまつ・しょうへい）

P.90, 130
笠畑里紗 さん
（かさはた・りさ）

P.110, 140, 150
山﨑詩歩 さん
（やまざき・しほ）



P.130, 160
齋藤ジェイソン さん
（さいとう・じぇいそん）

P.100
片山萌花 さん
（かたやま・もか）

interview

池田林太郎 さん

撮影場所 ● **港区立生涯学習センター（ぱるーん）**

旧桜田小学校。センター内の〈桜田小学校記念室〉に、疎開先の資料などが保存されている。

インタビュアー 藤田睦月（ふじた・むつき）さん

インタビュアー 金光美早紀（かねみつ・みさき）さん

インタビュアー 上野七海（うえの・ななみ）さん

疎開したのに栄養失調「迎えに来て」と書いたはがきは検閲で没収されました

父親と一緒に観にいったアメリカ映画に魅せられていたはずなのに、いつしか戦闘機乗りに憧れる軍国少年に。物資を供出したり、出征する兵士を送り出したりするたび、隣近所の目を意識していることに気づきながら、最後は神風が吹いて日本は勝つと思い込んでいたのはなぜだろう、と振り返る池田さん。嘘にだまされないようにするには、自分でいろいろなものを見て自分で考えるしかないんですよ、と学生たちに語りかけます。

戦争体験者 **池田林太郎**（いけだ・りんたろう）**さん（88歳）**

昭和11(1936)年、新橋の生まれ。きょうだい6人と、住み込みの職人やお手伝いさんがいる仕立て屋の大所帯を、母親が切り盛りしていた。長男の林太郎さんは、生地問屋や客先へもお使いに行かされたが、腕の良い職人だった父親が亡くなり、家業は継がず勤め人に。戦中の過酷な体験から、戦争は人のいろいろな面を暴き出し、とくに飢えは人を変えてしまうと感じていた。戦争中のことは家族にも話していなかったが、「港区語り部の会」のメンバーとの活動を通じ、自分の体験を後世に伝えていく意義を感じるようになったという。

スポーツウェアも仕立てる モダンな注文服のお店

藤田――**戦前の新橋を覚えておられますか？**

池田――お店が多くて活気のある庶民の街でしたが、銀座と隣り合ってますから、ちょっとモダンな雰囲気でね。夕方になると芸者さんが料亭へ向かう、粋な街でもありました。新橋演舞場や歌舞伎座、東劇も近く、踊りや芝居などに関わる人が身近にいましたね。

両親と妹のはるみさんと4歳の池田さん

マルヤ服装店スポーツウェアのタグ

金光――**ご自身も芸事に関わられましたか？**

池田――あの頃の商店の子は、家業を継ぐと考えるものでした。私でしたら洋服屋。父は若い頃から手先が器用で、実の兄と蔵前でテーラー（洋装の注文服の仕立て屋）を始め、所帯を持ってから、新橋に「マルヤ服装店」という自分の店を構えたんです。とくにスポーツ服が得意でね。狩猟やスキー、野球やボクシングなど、いろいろなウェアを作っていました。近所に住んでる芸能関係者や芸術家たちもよく出入りしていて、ふつうの仕立て屋さんとはちょっと違った雰囲気でした。

上野――**オリジナルのタグがおしゃれですね！**

池田――画家がデザインしてくれたんじゃないかな。店を手伝いながら、私も父のような腕のいいテーラーになるんだと思ってました。ところが、太平洋戦争が始まり、

コラム1●隣組（となりぐみ）

国民統制の末端を担うために、昭和15(1940)年に作られた地域組織。町内会・部落会の下に位置づけられ、組、班、隣保班とも呼ばれます。近隣の十軒前後の世帯が一組とされ、動員や供出、配給といった、当時の国民生活の基盤となる業務のほか、出征兵士の見送り、遺族・留守家族への救援、空襲での防火といった活動も行いました。「とんとんとんからり」と調子よく始まる『隣組』という曲も作られ、「助けられたり　助けたり」という歌詞で、近隣が助け合う相互扶助を謳（うた）っていますが、実際には、隠し事ができないように隣人同士が監視し合い、思想の統制をはかる側面も併せ持っていたのです。

モンペ姿で防空演習〈バケツリレー〉をする女性たち
（提供：共同通信社）

幼稚園や学校でも「きょうも学校に行けるのは、兵隊さんのおかげです」なんて歌を習ってるうちに、男の子は軍人、女の子は従軍看護婦に憧れるようになるわけです。

私の場合は、飛行機が活躍する『加藤隼（はやぶさ）戦闘隊』のような戦争映画を観て、「戦闘機乗りになるんだ」と思ったものでした。『桃太郎の海鷲（うみわし）』といって、イギリスやアメリカに見立てた鬼ヶ島へ桃太郎が奇襲をかけて大勝利する、なんてマンガ映画もありましたよ。今からすれば、「少国民」と呼ばれる子どもに向けた、プロパガンダだったわけですけど。

金光――**大人たちに変化はありましたか。**

池田――戦争一色に染まっていきましたね。生活のすべてが、隣組を介して軍に統制されていくんですよ。防空演習は必ず全員参加だし、供出（きょうしゅつ）（軍需生産に使うため金属類を国に差し出す制度）したくない品があっても、近所の人から「あの奥さんは指輪を持ってたはず」と言われてしまう。「ぜいたくは敵だ」と、女の人ならもんぺ（裾がすぼまった和風のズボン）、男性も国民服を着ないと白い目で見られ、父の店でも軍服を作るようになりました。

金光――**子どもも訓練に参加するのですか？**

池田――桜田国民学校（のちの桜田小学校）に入りましたが、空襲警報が鳴ると、防空頭巾をかぶって逃げる練習をしました。ただ、新橋は都市化が進み、ほとんど舗装されてしまっていて防空壕（ぼうくうごう）がなかなか掘れない。大きなビルの地下が良いだろうということで、うちのあたりは第一ホテルが避難場所。学校はコンクリート造りでしたから、廊下の板を外して下にもぐれるようになってました。上級生は、敵機の爆音を聞いて「この音は、あの機種だ」と聞き分ける訓練を受けたそうです。男子は竹やり、女子はなぎなたで敵兵を倒す「一人一殺（いちにんいっさつ）」なんて訓練もあったけど、機関銃相手に勝てるわけがない。おかしな話ですよ。

上野 ―― そんなアメリカとの力の差を、子どもたちはわかっていたんでしょうか。

池田 ―― 撃墜されたB29が引き揚げられ、日比谷公園に展示されてるのを見に行ったことがあります。「こんな大きな飛行機を体当たりで落とすなんて、日本の兵隊さんは勇敢だ」と感激する一方、飛行機好きの私は、B29の尾翼が日本の戦闘機よりもはるかに大きいことにも気づいてましたね。

それでも私たちは、「日本が負けるわけがない」と無邪気に信じてたんです。一つには、大和魂さえあれば勝てる、と教わっていたから。もう一つには、事実が国民に知らされてなかったからです。ラジオも新聞も、大本営発表のニュースしか流せない。ぼろぼろに負けている戦闘でも「我が方の損害は軽微なり。敵の損害は甚大なり」と発表するものだから、国民は戦況の実態を把握できなかった。「最後は神風が吹いてアメリカの軍艦も全部沈む」なんて、よく考えたらあり得ない話なのに、不思議なもので外部からの情報が遮断され、つねに一方的な情報ばかり浴びていると、どんな荒唐無稽なことでも信じ込むようになるんですね。

上野 ―― 当時を描いたテレビドラマや映画などでは、召集令状が来ると「ばんざい!」で送り出していますが、本当にそうでしたか。

池田 ―― 私の身内も、何人か戦争に行ってます。赤紙（召集令状）は、役所の人が「おめでとうございます」と持ってきますが、家族にとっては、本当はおめでたくもなんともない。でも、近所にも兵隊に取られた人はいるわけだから、自分たちも「ありがとうございます」と赤紙を受け取って、「ばんざい!」と戦地へ送り出すしかなかったんです。

召集の命令は絶対なわけですよ。兵役から逃げた人もいるけれど、遠い親戚まで憲兵（軍事警察）に探しに行かれ、もし捕まれば、まず生きては帰れない最前線へ強制的に送られてしまう。そして戦死をすれば、英霊（戦死者の霊を敬った呼び方）として祀られます。無事に帰って来た人は「おめおめと生き残った」と後ろ指をさされるのですから、恐ろしいことです。

しかも軍からは、捕虜になるなら死ねと教育される。アメリカやイギリスでは、捕虜になっても生きて帰るのが鉄則でしたが、それは、軍人の命を大切にしていたからと、一人前に育てるのにたいへんな教育をしてきたからです。ところが日本では、まったく逆。そもそも日本軍は、食糧の補給が追い付かず、戦地で飢えや病気で亡くなる兵隊が多かったのですよ。

上野 ―― お父さまは、召集されなかったのですか。

池田 ―― 徴兵はされませんでした。それなりの年齢でしたし、ハサミかアイロンくらいしか重い物を持ったことがない人でしたから。しかし、手先が器用だったので、徴用（一定の仕事へ強制的に就かせること）されて造船所へ行かされたのです。そこでのことを、当時は何も話してくれませんでしたが、実は、爆弾を積んで敵艦に体当たりする木製モーターボート、つまり特攻兵器を作らされていたようです。それはもう絶対秘ですね。

上野 ―― お父さまはどう思っていたのでしょう。

池田 ―― 口には出せないものの、「この船で兵隊さんが死にに行くのか」とつらく思いながら、「ここまで追い詰められて、日本が勝つのは難しいだろう」とも考えていたようです。昭和19（1944）年あたりには、ある程度の知識があれば、そう思う人が多かったはずです。何しろ物資も食糧も全然足りなくなってたんですから。

点呼と朝礼の様子。『東京都桜田国民学校集団疎開学園写真集』より（『デジタル港区教育史』公開資料）

食糧がないのに学童を送り出す 疎開も戦争もやり方は同じ

藤田 ―― 疎開では池田さんも食べ物に苦労されたとか。

池田 ―― 昭和20（1945）年、小学3年から栃木の塩原温泉へ学童疎開しました。父は徴用で神奈川か静岡。自宅も強制疎開（空襲に備えて防火帯を作るために建物を取り壊すこと）で失われ、母と妹たちは草津へ縁故疎開（親族を頼って移住する自主的な疎開）。家族ばらばらの生活でした。

でも疎開と決まった時は、遠足気分でうれしかったんですよ。いつも遊んでる学校の友だちと一緒なわけですから。でも楽しかったのは最初の1日か2日だけで、だんだん家族が恋しくなってきました。

もっとつらかったのが、空腹です。食糧が豊富だった疎開先もあったのかもしれませんが、私たちが疎開したのは、戦争も末期。田んぼも畑もない観光地だから、地元の人も大変なくらいで、現地調達なんてとてもできない。

戦争は人のいろんな面を暴き出すけれど、とくに飢えは人を変えてしまいます。後先など考えられなくなり、トンボやセミも食べましたし、甘いものを求めて歯磨き粉まで舐めました。そのうえ、温泉には入れても、洗濯をする人手が足りないので、あっという間にノミやシラミだらけになって、血を吸われる。寄生虫もお腹に棲みついて、これまた養分を吸い取る。数カ月もしないうちに、私たちはひどい栄養失調に陥りました。

食糧がないのに軍を送り出すのと同じことが、疎開でも行われたわけです。

藤田 ―― 親に「帰りたい」と伝えなかった？

池田 ―― 疎開先でも検閲があったんです。家族へ送るはがきや手紙でも、軍や国のやり方に触れることを書いたら、没収されてしまいます。私が母に送ったなかでも、「元気でおります」と書いたはがきは届きました。しかし「つらい」とか「食べ物がない」と書いたときは、届かなかったことが、後でわかったのです。

8月に戦争が終わり、学校の検閲がなくなってから、「ノミやシラミがうじゃうじゃ」「どうかここから引き取って」と書いた手紙が、やっと親の元へ届くようになった。そこで初めて「これは大変だ」と、父が迎えに来てくれることになりました。それでも切符がなかなか手に入らず、ようやく9月に塩原へ着いた時には、私はもう歩くことさえできませんでした。むしろを敷いた大八車（荷車）に乗せられて、長野の佐久へ移っていた家族のもとへ向かいました。あとひと月遅かったら、私は生きていたかどうか。実際、その疎開中に児童が2人、栄養失調で亡くなったそうです。

藤田 ―― そんな状態で、玉音放送があったのですね。

池田 ―― 床屋のラジオを外に置いてくれたのですが、雑音がガーガー入って、何を言ってるかわかりません。それよりも、店の子が旧盆のおはぎを食べているのがおいしそうで（笑）。そっちばかり気になってました。

軍国主義から民主主義へ 180度変わった先生の態度

上野 ―― 疎開から戻った新橋はどんな様子でした？

池田 ―― もう、ずいぶん変わったなと。取り壊された実家のあとへ、父が何とか店と住まいを建ててくれていましたが、まわりに残っていた建物は、桜田小学校や住友銀行くらい。駅前にはバラックが建ち並び、復員兵が軍服のまま歩いていたり、戦災孤児が靴磨きしていたりと、とにかく雑多でした。

上野 ―― 食べ物はどんな具合でしたか。

池田 ―― お金か、物々交換に使える品があれば、闇市でどんなものでも手に入るようになってました。とくに新橋ではね。ただ、本物もあるけど、贋物も多かった。たとえば砂糖は貴重だから、サッカリンやズルチンといった人工甘味料。お酒だと、メチルアルコール（燃料や工業用のアルコール）。有毒なものも多いので、失明したり体を壊す人が大勢いました。本物の方は、たいてい進駐軍からの横流し品です。タバコならラッキーストライクやキャメル、石鹸ならラックス、チョコレートならハーシー。みんな素晴らしい品質でした。

上野 ―― もとの学校へ通い始めたのですね？

池田 ―― 疎開で離ればなれだった友だちと再会できて、うれしかったですね。ただ、あれだけ日本を褒めたたえ、敵国を「鬼畜米英」と攻撃していた先生たちの態度が、180度変わったことは疑問に感じました。とくに桜田小学校は、「桜田プラン」といって、新しい民主教育の実験校に指定されたんです。それで、指導に来るアメリカ人の

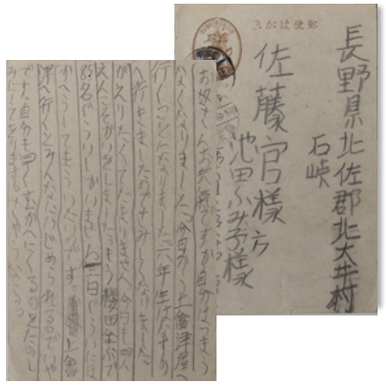
新橋駅から見た闇市。左奥の建物は桜田小学校（提供：昭和館、所蔵：米国国立公文書館）

疎開先から母への手紙

「閲」の印が押されたはがき

お母さん元氣ですか。自分は元氣です。朝早くおきるとすぐはだかになってかんぷまさつをします。つぎはふとんをたたみそうじをします。それがおわると外へでててんこをします。そしてたいそうがおわるとごはんをたべます。
（中略）
おふろをはいりそれからねます。はるみも元氣でではおからだをたいせつに
若林さんにもよろしくさようなら

終戦後に出されたはがき



お母さんお元氣ですか。自分はつまらなくなりました。今日から上會津屋へ行くことになりました。六年生はなすのへ行きましたのでさみしくなりました。かえりたくてたまりません。今日も四人えんこそかいをしました。もう櫻田全ぶで85名ぐらいしかいません。三日ぐらいにはかえらしてもらいたいのです。上會津へ行くとみんなにいじめられるのでいやです。自分も早くむかえにくるのをたのしみにしております。さようなら。

※漢字は原文のままですが、仮名は新仮名遣いに表記を改めました。

担当者に先生が恭しく接するものだから。「前とはずいぶん違うな」と、不思議というか、大人に対する不信感を持ったものでした。

上野 ―― どんな内容の教育だったのでしょうか。

池田 ―― 主体となるのは、社会科。しょっちゅう外へ出かけて、新聞社や銀行を訪問し、調べたことを新聞にまとめたり、校内放送の番組として流したりしました。学校新聞は、全国のコンクールに選ばれ週刊誌に載ったことも。そうした実践的な授業が多かったぶん、中学では基礎的な勉強で多少遅れを取りましたが、小さい時から大人と話すことには慣れていたので、営業マンになったとき多少は役に立ったかなと思います（笑）。

池田さんが代表となり編集・発行した学校新聞『SAN TAIMUZU』

また、以前は先生が級長を指名していたのが、クラスで選挙をして学級委員を決めるようになりました。学級委員長に選ばれて、バッジがもらえるのも誇らしかったですけど。

金光 ―― たくさんエピソードを話してもらって、当時の様子を具体的に捉えられるようになった気がします。

藤田 ―― 戦前の街や戦後の闇市などの様子を知って、どこか遠く感じていた戦争が、一気に身近に感じられました。

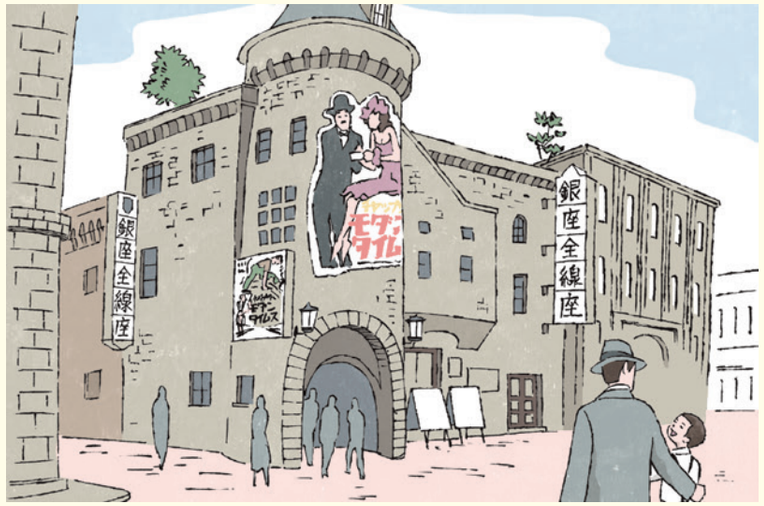
池田 ―― 一つを思い出すと、たぐり寄せるように記憶が次々とよみがえってきますね。皆さんには、家族が灯（あか）りの下で仲良くお腹いっぱい食べられる平和な世の中を、いつまでも続けてくれたらと思います。

池田さんからのメッセージ

あの頃は情報が一元的に管理され、実際に何が起きているか、知ることもできませんでした。逆に今は、いろんな情報があふれ、事実と嘘の見極めがつきにくくなっているような気がします。そのような中で正しい判断をしていくには、偏りのない情報へ広く接することと、本物を見ることが大切ではないでしょうか。テレビやスマホを介して見られるのは、物事のごく一部に過ぎません。山でも生き物でも外国の都市でも、小さな画面で見るのと実際に目の前にした姿はまったく違うでしょう。ちゃんと自分の目で見て、自分の頭で考えるようにしてもらえたらと思います。また同世代だけでなく、幅広い年代の人と話す機会も持ってください。「老害」だなんて言わずにね（笑）。

池田さんの物語
Story of My Life

雑誌や映画で憧れたアメリカの文化
戦後はアメリカの将兵がお店の顧客に



池田さんの父親は、若い頃からアメリカ文化に惹（ひ）かれ、注文服をデザインする参考のためもあって、『ヴォーグ』など海外のファッション誌を、いつも店内に置いていたそうです。

「生地や型紙の付いた、向こうの通販誌なんかもありましたね。フレッド・アステアのような映画スターの着こなしからも学べるものがあると、映画館にもよく通ってたんですよ。私も、ベティ・ブープやチャップリン、ターザンの映画に連れて行ってもらい、アメリカってすごいなあと思っていました。戦争中は、アメリカ文化が好きとはもちろん口にできませんでしたが、終戦後はまったく逆転。鬼畜米英と脅されていたのに、進駐軍は優しくフレンドリーなうえ、豊富な物資をもたらしてくれて、ほとんどの日本人は大きなショックを受けたはずです。父の店に注文にやってきたアメリカの将兵が、代金の足しに置いていったラックスの石鹸の素晴らしい香りと泡立ち！　今も忘れられませんね」

interview

泉 宏 さん

撮影場所 ● **山陽堂書店**

5月25日夜の山の手大空襲で、泉さんの母親をはじめ多くの人が店へ逃げ込み助かった。

インタビュアー **大橋樹亜良**（おおはし・きあら）さん

インタビュアー **田中陽暖**（たなか・ひなた）さん

「日本は負けるぞ」と諭す兄に「いざとなったら神風が吹く」と僕は言い返したのです

緑のこずえが揺れる並木沿いに、きらびやかな建物が並び、若者や外国人たちが楽しげに行き交う表参道。まさにこの参道が80年前、爆弾や焼夷弾によって火に包まれました。

並木も建物も激しく燃え上がり、渦巻く炎と煙に行く手をふさがれ、多くの人が倒れていくなかを、泉さんは走り続けました。敵機が去った翌朝、黒く焦げたり蒸されて白くなったりした無数の遺体を、一人ひとり確かめながら、当時15歳の泉少年は、はぐれてしまった父親を探し続けたのです。

戦争体験者 **泉 宏**（いずみ・ひろし）さん（95歳）

昭和5(1930)年、青山北町(現・北青山)生まれ。明治維新で東京へ移った佐賀・鍋島藩士の家系。モダンな父親に育てられ、5人きょうだいとも青南小学校で学ぶ。15歳で東京山の手大空襲に遭い、父親を失う。自宅も焼失し、母の実家である埼玉の桶川(おけがわ)へ疎開し、熊谷中学へ卒業まで通う。青山学院専門学校建築科に進み、建築事務所、大手設計会社を経て、自らの一級建築士事務所を開設。79歳の秋、ビルマ戦線に送られ北部バーモで戦死した長兄を弔うために、慰霊団の一員としてミャンマーを訪ねた。

実際の戦況を知らぬまま日本は勝ってるとさえ僕は思っていたんです

田中 ―― 小さい頃はずっと戦争の時代だったのですね。

泉 ―― 生まれたのは昭和5（1930）年、翌年に満州事変が起きた頃です。その後、日中戦争から太平洋戦争へ突入し、昭和20（1945）年に15歳で終戦になるまで、僕の少年時代は戦争とともにありました。

大橋 ―― その頃の青山はどのような街でした？

泉 ―― 表参道から今の骨董通りにかけては、青山通り沿いに商店街がありましたが、木造2階建ての瓦屋根がほとんど。商業地というよりは、落ちついた住宅地だったのです。オリンピックをきっかけに拡幅されるまでは、青山通りももっと狭かったのですが、路面電車（市電・都電）は走っていました。

大橋 ―― ごきょうだいは？

泉 ―― 男4人女1人の5人きょうだいの末っ子で、青南小学校へ通っていました。

大橋 ―― お友だちとは、どんな遊びを？

泉 ―― 鬼ごっこをしたり、馬跳びをしたり。ベーゴマやメンコなんかもよくやりました。

田中 ―― 戦争の影響は感じておられましたか？

泉 ―― ふだんは意識しなかったけれど、小学2年の頃、丸坊主にされたことは覚えています。その後、中学あたりで空襲が始まる頃から、生活へ戦争が入ってくるのを感じましたね。小学生の頃はまだふつうだった食事も、中学になると厳しくなって。お米が配給になったり、着るものが制限されたりもしました。

田中 ―― 日常生活も変わっていくのですね。

泉 ―― 勤労動員で、海軍の技術研究所へ行かされ、中学2年の僕は、製品テストで不良品を見分けるような作業をしていました。先輩たちは、街の一角を壊して防火帯を設ける、建物疎開の作業をしていました。

青山通り側から見た表参道。昭和11（1936）年頃（提供：橋本栄氏）

田中 ―― 学校へは通えたのでしょうか？

泉 ―― 週に1回通って軍事教練です。銃剣術（銃の先に付けた剣で戦う武術）や行進のような訓練をしたり、軍人勅諭（天皇による軍人精神についての訓示）を覚えさせられたり。また、始業式や天長節（天皇誕生日）、春分の日などの節目には、講堂に集まるんです。ふだんは幕がかかっている御真影（天皇の肖像写真）に拝礼をして、校長先生が読みあげる教育勅語（天皇による国民の教育目標についての訓示）を聞きました。

田中 ―― 戦争についてどう思っていましたか？

泉 ―― 軍国主義教育を受け続けるから、いつのまにか軍国少年になり、お国のために命を捧げられる、ぐらいの感覚に陥っていたんじゃないかな。

田中 ―― 地域でも変化はありましたか？

泉 ―― 防空演習ですね。竹のはたきで火をたたいて消すとか、バケツリレーとかいった消火訓練が、毎週あるんですよ。

田中 ―― 戦況をどう捉えていたのでしょう。

泉 ―― 実際にどんな状況なのかを、僕らは何も聞かされていなかった。それどころか、日本は勝ってると思っていたのですよ。開戦して半年ほどしか経っていないミッドウェー海戦で、もう日本は決定的な敗北を喫したことを、海軍の予備学生（主に大学出身で士官教育を受けた軍人）だった2番目の兄が話してくれました。しかし「日本は負けるぞ」と言われても、僕は「いざとなったら神風が吹く」と、まったく信じなかった。そのうちに、アッツ島で軍隊が玉砕したとかいう不利な戦況が、大本営からもだんだん発表されだしましたが、それまでは虚偽の発表を繰り返していたわけです。

下町空襲を眺めたときは自分たちもそうなるとは思いませんでした

田中 ―― 昭和17（1942）年4月に、初めて東京へ空襲が行われます。

泉 ―― まず警戒警報があり、そのあとに空襲警報が鳴ると、敵機が飛んできます。はじめのうちは、日本も戦闘機や高射砲で防衛したのですが、そのうちに、向こうの飛行機の性能が上回っていき、こちらの兵力も失われて迎撃できなくなると、警戒警報のあとすぐ空襲警報が鳴っていました。

田中 ―― 昭和20年3月10日には、下町が大空襲に遭いました。

泉――その夜は、向こうの空が赤いぞって気がつき、あの辺だと本所・深川のあたりかなと、自宅の屋根に登って、それこそ高みの見物をしていました。2カ月後に自分たちの街も空襲を受けるなんて、考えもしなかったのです。それに、下町の空襲でどれだけ人が亡くなり、家が焼滅したといった情報は、何も発表されなかった。ただ、火たたきやバケツリレーなんて全然役に立たないとか、ともかく逃げるのがいちばん、とかいった噂が伝わってきました。

田中――**そして5月25日、山の手の空襲に遭うわけですね。**

泉――夜10時頃に空襲警報が鳴り、まず母と姉から先に避難することにしました。行き先は、今の代々木公園にあたる代々木練兵場。兄たちは兵隊に取られて不在ですから、家に残ったのは、父と中3の僕の2人だけ。そして、町会役員だった父も「近所の様子を見てくる」と、出て行ったのです。それが父との最後の別れになりました。1人で残っていたら、ザーッと降ってきた焼夷弾がタンタンと屋根に落ち、あちこちで火が噴き出しました。家を守ろうと、いくらか消火にあたってはみたものの、耐えきれず、その場から逃げ出したのです。

田中――**どのように逃げられたのですか？**

泉――自宅は、今のAoビルあたりにありましたが、まず裏通りに入り、表参道の方へ逃げました。しかし、ふつうの火事と違い、空襲ではあちこちが同時に燃えるため、すぐに炎と煙に囲まれて、逃げ場がなくなってしまうんです。ただ燃え盛って焼け落ち、一瞬、火も煙も途切れたところがあり、そこをめがけて走りました。

田中――**代々木練兵場を目指したのですか？**

泉――表参道へ出ると、両側の建物もケヤキ並木も火に包まれ、風が起きて炎と煙が渦を巻き、とても代々木の方へは向かえない。それで進路を変え、青山通りに出て墓地の方へ向かおうとするのですが、その最中も火が追いかけてきて、一緒に走っている人たちが途中でバタバタ倒れていくんです。その人たちを助けることも、振り返ることもできないまま、走り続けるしかありません。墓地まで行き着けないかと諦めかけたら、途中に軍用倉庫があって、そこにいた兵隊さんが僕を中に入れてくれたのです。ただ、しばらく休ませてもらったその倉庫も、その後に燃え始め、隣の赤坂青山警察署の脇にあった、建物疎開の跡地に身を潜めました。その空き地で、ある母親がお産をし、残った煉瓦塀の向こうで、何人かが身を寄せながら亡くなっているなか、朝を迎えたのです。

田中――**爆撃自体は終わったのですね。**

泉――夜が明けて、まず自分の家に向かったのですが、着いたら、五右衛門風呂の釜だけが残り、あとはすべて灰になっていました。どっと疲れが出た僕は、焼け跡に寝転んでいたんですが、ちょうど戻ってきた姉は「宏が死んでいる！」と思ったそうです。

無数の遺体を確かめながら、こんな姿の父は見たくないとも思っていました

田中――**街はどんな様子でしたか？**

泉――いたるところに遺体が転がっていました。ほとんどまっ黒焦げで性別不明の状態です。

田中――**ご家族とは再会できたのですか？**

泉――姉と一緒に母を探していたら、青山通りで会えました。表参道で火に追われた母は、手と胸にやけどを負いながら、交差点にある山陽堂の本屋さんに助けてもらったそうです。コンクリート造りの建物は、もう人でいっぱいだったのに、知り合いが中へ引き込んでくれたのです。姉と僕は、母を近所に託して、父を探しに行きま

空襲の記憶を残す表参道の石灯籠

山陽堂書店の4代目店主・遠山さん（写真右）

コラム2 ●空襲に耐えた山陽堂書店

表参道と青山通りの交差点に建つ山陽堂書店は、火の海のなかでも、焼失を免れました。鉄筋コンクリート造りや、鉄製のドアや耐火ガラスの窓に加え、地下室に井戸を持っていたことが、バケツリレーによる消火や飲用に役立ったのです。それでも、80～100人ほどが逃げ込んでいた建物の中はぎっしりで、逃げ込もうとした泉さんの母親も、とても入れずにあきらめかけたとき、「泉さんの奥さんだ！」と知り合いが引き込んでくれたことで、助かったそうです。今も家族で書店を続ける、店主の遠山秀子さんは、幼い時から戦争の話を聞いて育ったそうです。空襲の夜を知る人たちから、証言や資料を託されることも多いため、店内のギャラリーでの展示やさまざまな媒体を通して、記憶を伝える活動を行っています。

昭和6（1931）年の山陽堂書店
（提供：山陽堂書店）

した。表参道の安田銀行（現・みずほ銀行）の脇にできていた遺体の山や、道端の防空壕、マンホールの中、避難所などあらゆるところを探しましたが、遺体も足跡も見つかりませんでした。真っ黒に焦げたり、真っ白な蝋人形のようになったりした遺体を、一人ひとり確かめているうちに、こんな姿の父を見たくない、という気持ちも湧いてくる。それほど、どの遺体も無残でした。見つかってほしい、いや見つからないでほしい、という相反する思いを抱えたまま、ずっと探し続けました。参道で見かけたという情報だけは得られたものの、ついに、父は戻ってこなかったのです。

田中 ―― 自宅を失ってどうされたのでしょう。

泉 ―― 父の兄が駒沢にいたので、そこに住まわせてもらいながら、その伯父と一緒に焼け跡の整理をしました。一方、父の姉が十条にいて、その娘婿が軍医だったので、母を預けて治療をしてもらったんです。1週間ほどして、母の傷がよくなってきた頃に、母の実家がある埼玉の桶川へ縁故疎開をすることになりました。

疎開先の中学へ向かいながら まぎれもない空襲の焼け跡の 臭いを嗅いだのです

大橋 ―― その疎開先で、玉音放送を聴かれたのですね。

泉 ―― 桶川では、母の実家の小屋裏を借りました。中学3年だった僕は、少し離れた熊谷中学へ通うことになったんです。入学の手続きが、ちょうど8月15日。汽車に乗ったら、ひとつ手前の吹上の駅で止まってしまい、そこから熊谷まで歩かされたのですが、その途中、焼け跡特有の臭いが漂ってきました。それは、木や土、そして人が焼ける、忘れようとしても忘れられない臭いなんです。実は前日の14日に、熊谷は空襲にやられていたんですね。学校で手続きを終え、帰路につくときには、運転が再開していたので、汽車で桶川まで戻ってきたんです。すると駅には誰もいません。みんなが駅長室に集まって、何かを聞いているんです。それが敗戦を告げる玉音放送だったんですね。

大橋 ―― 疎開先での学校生活が、戦後に始まったわけですか。

泉 ―― 疎開先では、相手のお世話になるわけですから、肩身の狭い思いをすることが多いようですね。幸い僕の場合は、母が実家の長女だったので大きな顔ができ、卑屈にならずにいられたんですよ。学校でも、同じ沿線の下級生を上級生から守ったことから、いつしか後輩から慕われるようになり、一度もケンカをしないまま、いわゆる番長になっていました。

大橋 ―― 熊谷中学では、どんなことを？

泉 ―― 友だちの家で作っているお米とか、近くの行田の名産のキャラコ（丈夫な木綿の生地）の足袋とかを、東京の闇市へ持っていって売り、みんなでお金を稼いだかな。友だちと東京へ遊びに行くときは、僕がみんなを案内しました。そこは東京育ちだから、「東京で遊ぶなら銀座だろ」なんて、みんなを銀座へ連れて行ったりしてね。

大橋 ―― ごきょうだいはどうされましたか？

泉 ―― 長兄はビルマ（現・ミャンマー）戦線で戦死したのですが、遺骨は戻ってきませんでした。2番目と3番目の兄は昭和21（1946）年に復員しますが、熊谷ではお金も稼げないので、青山の焼け跡にバラックを建てることになって。母と姉も一緒に戻るため、僕1人で熊谷に残りました。中学を卒業するのと同時に東京に戻り、青山学院専門学校（現・青山学院大学）建築科に入学します。中学の授業で出た、住んでいる家を平面図に起こすという課題が、すごく楽しかったことが、建築の道へ進むきっかけになりました。

コラム3 ● 戦災孤児（せんさいこじ）

戦争では、多くの子どもたちが家や家族を奪われました。とくに集団疎開の小学生が戻ったとき、何もかも失ったまま、街へ放り出されることも多かったのです。外地からの引き揚げ孤児も含め、約12万人いたとされる彼らは、戦後も上野の地下道や有楽町のガード下などで、寒さや飢えをしのぎました。仕事はなく、国による救済もされず、世間からも冷たい目で見られるなか、食べるために万引きやかっぱらいなどに走る孤児たちは、福祉ではなく治安の対象として扱われていくことになります。「浮浪児」とされ、占領軍や警察が行う「狩り込み」と呼ばれる強制収容によって、保護施設へ送り込まれました。当時、陸から隔絶した島であった第五台場に設けられた『東水園』も、そのような施設の一つだったのです。

品川沖第五台場にあった戦災孤児の収容施設〈東水園〉。窓に鉄格子がはめられている（提供：毎日新聞社）

「知らないままじゃいけない 伝えることが俺たちの義務だ」と仲間に言われたんです

田中 ―― 戦争を体験されたことを、あまり話してこられなかったそうですね。

泉 ―― 自分の娘たちにも、ずっと口を閉ざしていました。当時のことを話せば、悲惨すぎる思い出がよみがえってしまうからです。それがあるとき、青南小学校の同級生から『表参道が燃えた日―山の手大空襲の体験記―』への寄稿を頼まれ、空襲の記憶を初めて文章にしたことから、体験を人前で話す活動にも参加するようになりました。平成19（2007）年のことです。それでもつらくて、ときには断ることもあったのですが、「俺たちが伝えなきゃ、世の中の人が知らないままになってしまう」と仲間から言われたんです。そのこともあり、『続・表参道が燃えた日』を刊行するときには、僕も編集委員に加わらせてもらいました。

大橋 ―― これからも語り部を続けていかれますか？

泉 ―― 僕は95歳になります。同世代で亡くなった人も多い。なんで自分は生きてるんだろう、と思ったこともあります。でも、あの空襲の炎の中で助かったということは、お迎えが来る日までは死んではいけない、ということじゃないか。だから、生きている限りは語り部を続けていくつもりです。

区政六十周年記念碑「和をのぞむ」

泉さんからのメッセージ

戦争をしてはいけない、これに尽きます。日本は戦後80年も平和な状態が続いている。こんなにも素晴らしいことはありません。戦争放棄を明記した憲法は、これからも守っていかなければならないもの。与えられた憲法だという人もいるけれど、平和を旨とする憲法の価値は、もっと世界中に知らしめるべきものです。また、戦争では必ず孤児が生まれることも忘れないでほしい。僕らの時代においても、上野や有楽町で大変な生活を強いられている孤児たちが、たくさんいたことが目に焼き付いています。今も戦争が続くウクライナやガザ地区などでも、戦災孤児が生まれている。戦争そのものももちろんやめるべきだけど、それによって犠牲になる子どもたちのことを、ちゃんと考える責任が大人にはあるはずです。

泉さんの物語
Story of My Life

戦時下に布団をかぶって楽しんだ敵国の音楽

元・佐賀藩士の家系である泉さんの父親は、旧・藩主である鍋島侯爵家で経理の仕事をしていたそうです。

「腰が低く温和な人でしたが、お洒落（しゃれ）なモダンボーイでもありました。センスが良く、自分でも洋風スタイルの服装を好み、母の着物や浴衣、僕らきょうだいの服も見立ててくれたものです。年に何回かのお出かけは、いつも銀座。東京宝塚劇場で芝居を観て、洋食を食べて帰るのが、父のお気に入りでした。子どものテーブルマナーにも厳しかったですよ。戦争が始まると、敵国である米英の言葉を使うことだけでなく、音楽を聴くことも禁止されてしまいます。レコード盤も取り上げられるわけですが、洋楽をこよなく愛していた父は、こっそりと隠し持っていました。外に音が漏れないよう、家族全員で布団を頭からかぶって、ポータブルの蓄音機でジャズやクラシックなどを楽しむのです。『ボレロ』や『セビリアの理髪師』などをよく聴いていたことを、今も思い出します」

interview
井上 繁 さん

撮影場所 ● **桜田公園**

関東大震災の復興のため、旧桜田小学校とともに〈桜田公園〉が整備された。

インタビュアー 鹿又大輔（かのまた・だいすけ）さん

インタビュアー 笠畑里紗（かさはた・りさ）さん

「なぜこんな死に方をしなくてはならないんだろう」大量の焼けた遺体に呆然としました

埼玉の栗橋町（現・久喜市）で母やきょうだいとともに疎開生活を送っていた井上繁さんは、中学校進学のために帰京。それからまもなく、2度の大空襲を身近に体験しています。一変した街の風景と無惨な姿で死んだ人々の姿を目にして、少年だった井上さんは呆然と立ち尽くしました。戦争が終わって4年半ぶりに家族揃って暮らせるようになっても、しばらくは苦しい生活が続きます。そんな現実に負けず、力強く生きてきた井上さんを支えたのは「人さまとの良いご縁には恵まれている」という感謝の気持ちでした。

戦争体験者 **井上 繁**（いのうえ・しげる）さん（92歳）

昭和7(1932)年、田村町(現・西新橋)生まれ。昭和19(1944)年に埼玉の栗橋町に母親ときょうだいとともに疎開するが、翌年帰京して東京都立第一中学校に入学。昭和20(1945)年4月15日と5月25日の2度の空襲を経験する。終戦後、疎開先から戻った家族と6人で、戦争前に住んでいた土地にバラックを建てて生活。高校卒業直後に脳溢血で倒れた父に代わり、あん摩マッサージ・指圧師となって家族を養う。平成13(2001)年に結成された「港区語り部の会」の会員となり、自らの戦争体験などを語り継ぐ活動に取り組んでいる。

疎開先の農村でもお米のご飯はめったに食べられなかった

鹿又 ―― 太平洋戦争が始まった頃のことは、覚えておられますか？

井上 ―― はい、よく覚えています。当時、私は小学3年生でした。開戦後まもなく、先生に引率されてクラス全員で映画を見に行きました。その時に見た『ハワイ・マレー沖海戦』は、今も心に強く残っています。日本の飛行隊がアメリカやイギリスの軍艦をやっつけるシーンにみんな大喜び、日本軍の強さに感激しました。

でも、ふだんの生活では戦争を意識することはありませんでした。毎日、日暮れまで友人たちと楽しく遊んでいました。家の前の道路が遊び場で、学校から帰り玄関にカバンを置いて家を飛び出すと、近所の友人もゾロゾロやって来て、すぐに10人や15人は集まります。あの頃はどこの家も子どもが大勢いましたからね。

鹿又 ―― 太平洋戦争が始まって、街に変化はありましたか？

井上 ―― 開戦の頃はまだ、大人たちも戦争を意識していなかったと思います。すでに日中戦争が始まっていたのですが、戦場は遠い外地で日本にはまったく影響はなかった。アメリカとの戦争もきっとそんなものだろう。と、皆が楽観していたようです。

しかし、昭和19（1944）年に入ると世間の雰囲気はがらりと変わります。日本軍が劣勢に追い込まれ、日本本土も敵機の空襲を警戒しなくてはならない状況になってきました。建物疎開や防空訓練がさかんに行われ、政府は都市部で暮らす子どもたちの疎開を奨励するようになります。すると人々の間にも不安や緊張が高まり、急に「戦争」が現実味を帯びてきたのです。

笠畑 ―― 井上さんも疎開をされたのですよね。それはいつのことですか？

井上 ―― 学校ごとの集団疎開が始まるのは昭和19年9月ですが、私はそれよりも早い4月に、母の実家近くの埼玉県栗橋町へ疎開しました。商家の離れを借り、当時15歳だった姉と小学3年生の弟と3人で最初は暮らしました。母が空襲が激しくなる前に子どもたちを逃がそうと、実家の兄に頼み込んで借家を探してもらったのです。

夏休みが終わった頃には、母と幼い妹2人も疎開先に合流してきました。しかし、6畳一間と3畳の板間だけのとても狭い家です。そこで6人が暮らすのですから、かなり窮屈でしたよ。

笠畑 ―― 食糧事情はどうでしたか？

井上 ―― 戦争末期は田舎でも食糧事情が悪く、お米のご飯なんてめったに食べられません。サツマイモやダイコンの入ったおかゆを食べていました。

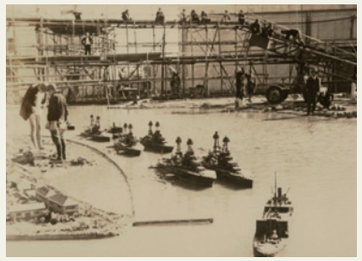
母が戦争前によく作ってくれた、細かにネギを刻んで冷やご飯と一緒に油で炒める焼きメシ、今で言うチャーハンですが、私はそれが大好きでした。ある時疎開先で、丼に入れたご飯が台所にあったので「母ちゃん、そのご飯で焼きメシを作ってくれよ」と言いました。すると母は「お前ね、これを焼きメシにしたら2人分にしかならないよ。6人にはとても足りない。おかゆにすればみんながお腹いっぱいになる。母ちゃんも焼きメシぐらい食べさせたいけど、今はできないんだよ」と言うんです。その時の母の淋しげな表情が心にズシンときて、それからは食べ物については一切注文をつけませんでしたね。

笠畑 ―― 疎開先でつらいことはありましたか？

井上 ―― 戦っている兵隊さんのことを思っていたので、つらいと思ったことは何もありませんでしたよ。近隣の農家へ、学校か

コラム4 ● 映画『ハワイ・マレー沖海戦』

昭和17(1942)年12月公開の『ハワイ・マレー沖海戦』は、戦争の士気を高める目的で海軍省が企画し、東宝映画が製作した映画です。1人の少年航空兵が厳しい海軍の訓練を経て成長し、真珠湾攻撃とマレー沖海戦に臨むまでの物語で、空前の大ヒットとなりました。監督は喜劇映画を数多く手がけた山本嘉次郎、特撮シーン担当は、戦後『ゴジラ』や『ウルトラマン』をはじめ、数々の特撮映画・テレビで世界的に有名になる円谷英二。実際の海軍の取材は許されず、資料も乏しい状態での製作は困難を極めました。にもかかわらず、実物大の空母のセットやミニチュアを使った戦闘シーンのリアルさは、本物の記録映画と勘違いされるほどでした。少年が戦争に巻き込まれていく悲劇の人間ドラマとしても評価されている作品です。


1/4,000スケールで創られた真珠湾のセット（所蔵：国立映画アーカイブ）

ら手伝いに行きました。田植えや草刈りなどの農作業は、都会生活では経験できないことで楽しかった。そして、手伝いのご褒美に振る舞われた白米のおにぎりの美味しかったこと。あの味は忘れることができません。

何より疎開先での生活が楽しく思えたのは、転入先の小学校で先生や級友に恵まれたからでしょう。私をよそ者と差別することはなく、昔からの仲間のように親しく接してくれました。一部の級友とは戦後も交流が続き、80歳近くまで一緒に旅行に行っていました。

焼けただれて歩く人々と大通りのあちこちに転がる焼死体

笠畑 ―― 疎開先から東京に戻った理由は？

井上 ―― 疎開先には近くに中学校がなく、昭和20（1945）年の春、進学のために東京に戻ることにしたんです。

笠畑 ―― 東京での暮らしはどうでしたか？

井上 ―― 1人で東京に残っていた父と一緒に暮らしながら、都立一中（現・日比谷高校）に通うことになりました。自宅が建物疎開で取り壊されてしまい、家を失った父は近所に空き家を見つけて住んでいました。当時の東京には住人が疎開※して空き家になった家が多くあって、建物疎開や空襲で家を失った人々が勝手に移り住んで暮らしていました。

家財道具は疎開先に送っていたので、私たちの手元にあるのは着替えと寝具だけ。家には何もなく、やることもありません。退屈していると空腹や寒さがいっそう身に沁（し）みました。学校へ行って級友たちと話をすることだけが、唯一の楽しみでした。

笠畑 ―― 中学校入学から間もない4月15日の空襲について何か覚えていますか？

井上 ―― 4月15日の空襲では、戦前に住んでいた家の辺りに焼夷弾が落ちて一帯が焼き尽くされました。当時、私と父が無断※借用していた空き家は、大きな通りを挟んでいたので延焼を免れましたが、通り向こうの家屋は凄まじい炎に包まれていました。それを目にして「自分は運が良かったんだなぁ」と、思いました。もしも建物疎開が行われずに、あの家に住んでいたら……炎の中を逃げまわることになっていたからです。

笠畑 ―― 翌月の5月25日にも山の手に空襲がありましたが、その時はどうでしたか？

井上 ―― 都心一帯が大きな被害を受けたのがこの日の空襲です。来襲した500機以上ものB29がばら撒（ま）いた焼夷弾で見渡す限り火の海でした。それまでの経験で、前に焼夷弾を落としたところには二度と落とさないことがわかっていましたから、焼け跡に移動し、空襲が終わるのを待っていました。

笠畑 ―― 夜が明けてからどうされましたか？

井上 ―― 学校に行きました。麹町（こうじまち）から青山、赤坂方面は全滅したという噂が流れており、私の通う中学校がその方面にあるので心配だったのです。

路面電車（都電）は動いておらず、徒歩で学校へ向かいました。虎ノ門の交差点を左折すると、溜池（ためいけ）方面からゆっくりと歩む被災者の長い行列に出合いました。その異様な風景、全員が無言でうつろな表情、顔や手足や着衣は煤（すす）けている。煙で目を痛めたのか、布で目の周りを鉢巻状に覆い、人に手を引かれて歩く人も大勢いました。

学校に着いて目にした状況は、校舎の半分が焼かれ、体育館は全焼していました。登校して来る者は皆無だったので、校舎に別れを告げ、赤坂見附方向への坂を下りました。

外堀通りに出ると、300体ほどの焼死体があちこちに転がっていました。広い通りの真ん中でなぜこんなに真っ黒焦げなのか不思議でしたが、弁慶橋方向へ逃げて助かったという人が、「炎が道の両側から中心に向かって地面を這（は）ってるんだ。その勢い

コラム5 ● 建物疎開（たてものそかい）

〈疎開〉とは、兵と兵の間隔を広げて攻撃を受けにくくする、という意味の軍事用語でした。しかし、空襲の激化に伴って、人や建物、物資や産業などを避難させて被害を減らす、という政策の意味でも使われるようになりました。このうち、人の疎開は郊外や地方へ移動分散させる形でしたが、建物の疎開は、ある地域の建物を取り壊し空地帯を設けておくことで、延焼を防いだり、消火や避難をしやすくしたりする形で行われたのです。都市部の密集地や、工場や軍事施設の付近などが選ばれ、該当する家屋の居住者は、短時間でどこかへ移らなければなりませんでした。一定の金銭補償はありましたが、少額なうえ、支払われないこともあったようです。居住者の意思は考慮されず、ほぼ強制的に執行されたため、「強制疎開」とも呼ばれました。

強制疎開で取り壊される建物。昭和19年6月、東京・浅草千束町（提供：共同通信社）

※東京都は警視庁と協力し、空き家・空室を管理して入居の斡旋をしていた。

空襲で多くの建物が焼失した霞ケ関・内幸町あたり（提供：共同通信社）

ときたら凄かった」と話をしてるのを耳にして納得したのでした。

赤坂見附の都電の停留所には、正規の線路に並行して別に待避線があったのですが、その線路上に燃え尽きた2台の車両が並んでいるのが目に入りました。近づいてみると、両方の車体の梁の上にはどちらにも十数体の焼死体が横たわっていました。話は道路上へと戻りますが、炎から身を守ろうとして畳を背負って逃げるつもりが逃げ切れず、畳を背負ったまま亡くなっている人がいました。畳からはみ出していた上半身は真っ黒焦げ、集まって来た人が畳を持ち上げたところ、下半身は着衣も焼かれることなく生身のままでした。「なぜ、こんな惨めな死に方をしなくてはならないんだろう」と、焼死体を呆然と眺めながら思いました。

聞き取れなかった玉音放送 初めて見るアメリカ兵の姿に衝撃

鹿又 ―― 玉音放送はどこで聞きましたか？

井上 ―― 8月15日に大切なラジオ放送があると告げられていたのですが、ラジオがなかったので隣家にお邪魔して聞かせてもらいました。ラジオの雑音がひどく陛下の声は聞き取れず、何を言っているのかまったくわかりません。

鹿又 ―― その時、周囲の人々の反応はどうでしたか？

井上 ―― 玉音放送が終わって家の外に出ると、近所の大人たちが「戦争は終わったということよね」とか「これから先どうなるのかしら」とかいうような話をしていました。誰もが戦争に疲れ果てていたものでほっとした半面、将来について不安な気持ちが生まれてきていることを感じました。

そのあと、日比谷通りに出ると、目から溢れ出る涙を拭おうともせず走り過ぎて行く一人の若い海軍士官に出会いました。その姿は戦争は確かに終わったのだということを物語っていました。

鹿又 ―― 進駐軍が東京に来た日のことは覚えていますか？

井上 ―― 玉音放送から10日ほど経って。警察から「明日、進駐軍がこの前の通りを通るけど、何かあるといけないから、通りへ出たり窓から見たりしないように」との知らせがありました。でも怖いもの見たさで、通りに面した2階の窓をほんのちょっぴり開けて、その隙間から覗き見しました。騎兵師団と聞いていたので、馬に乗って来るんだろうと思っていたらジープでした。ゆっくりと進む全てのジープの後部の荷台には、将校と思われる軍人が1人乗っていて、しゃれた帽子を斜めにかぶり、両手は身体の後ろに回し、両足を少々開き、前方を向いて直立不動の姿勢。そのあまりの恰好良さに、上陸して来たら竹やりで突き殺すつもりの敵であったことをすっかり忘れて、行列が終わるまで見続けてしまいました。

笠畑 ―― 終戦後の暮らしはどうでしたか？

井上 ―― 戦争末期に住んでいた家は、持ち主が疎開先から戻ってくることになったので立ち退き、郊外の父の兄の家へと引っ越し、母と弟妹たちは疎開先での生活を続けていました。家族が別れて暮らし始めてから4年、終戦から3年ほど経った時点で、戦前住んでいた所に家を建てることになりました。家と言っても母が兄に頼み込んで譲ってもらえることになった納屋です。解体して馬車で東京へ運び込み組み立てました。屋根はトタン板が売ってないのでコールタールを沁み込ませた厚紙を貼り、窓はガラスも売ってないので紙障子、雨が降ってくると外側に雨戸を立てる、畳も入手できないのでゴザ、バラックです。

笠畑 ―― そこに家族全員で暮らしたのですか？

井上 ―― そうです。寝るのは雑魚寝。電気と水道は引けましたが、ガスは引けなかったので、煮炊きは七輪で炭火をおこしてその上でしました。トイレの汲み取りは来てはくれないので、屎尿は溜まると深夜に汲み取り、道路の中央にあるマンホールの蓋を開け、そこから下水道へと流していたのです。

今では考えられないような生活でしたが、一つ屋根の下で家族全員が揃って暮らせるようになったことは、うれしかったですね。

鹿又 ―― その後、生活は楽になりましたか？

井上 ―― 家族で一緒に暮らし始めて2年後、私は高校を卒業しました。働きながら夜間の大学に通っていましたが、1年後のある日、突然全身が震え出し、その激しさ

ときたら、布団の上にまたがって押さえつけてくれていた弟をはね飛ばすほどでした。その震えは30分ほどで止まったのですが、そのあと寒気がしたので風邪を引いたのかなと思って、体温を測ってみると、当時の水銀体温計の目盛りは最高が42度でしたが、その最高の目盛りまで水銀柱は到達していました。ということは42度を超すほどの高熱だったのです。それ以後急激に痩せだし、1週間後には手足は骨と皮。その上に身体中の関節が次々と強烈な痛みに襲われました。でも医者にはかかりませんでした。健康保険制度はまだなかったので、医者にかかるにはお金がかかるからです。当時我が家の家計は家族が食べていくだけで精いっぱい。医者にかからなかったのではなく、かかれなかったのです。でも幸いなことに発病2カ月後には痛みは去り、半年後には元の身体に戻ったのですが、さらに悪いことが続きました。父が脳溢血で倒れたのです。となると長男である私が家族の生活を支えていくほかないわけです。当時の高卒の月給は5千円ほど、姉は結婚したので家族は5人でしたが暮らしていくには間違いなく足りません。いろいろと考えた末に、父親と同じ仕事を始めることにしたのです。

鹿又 ―― どのようなお仕事をされたのですか。

井上 ―― 父の趣味はカメラ、母の趣味は毛糸編み。ところがなんと2人とも手元は見えるのですが、ちょっと離れたところはぼっきり見えないという目だったのです。視力に障害があると職業は限られ、その主たるものはあん摩（指圧・マッサージ）でした。切羽詰まった私が見よう見真似で始めてみると、すぐに忙しくなって、なんと月収が2万円を超したのです。暮らしは安定し、4年後にはバラックの前半分を、その5年後には後ろ半分を、2階建ての家に建て替えることができました（なお、その間に専門の学校に通い免許を取っています）。

井上さんからのメッセージ

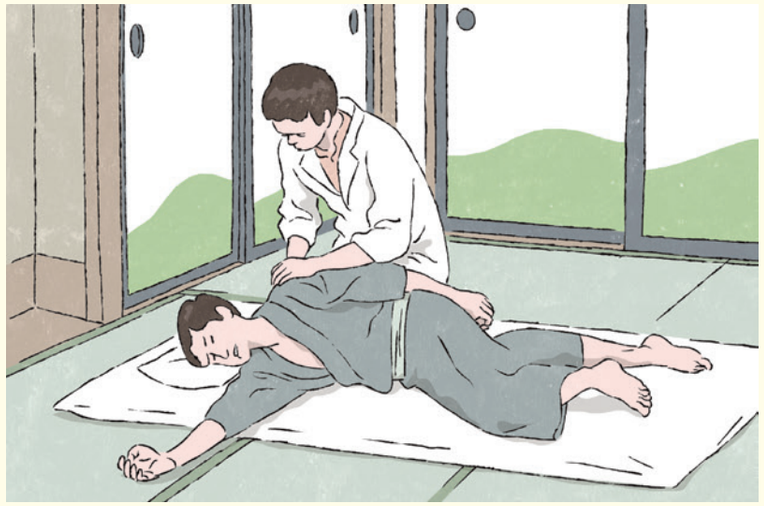
残念なことですが、この世から戦争がなくなることはないと私は思っています。世界に80億人もの人がいれば、自分の野心のために戦争を起こす人が必ず現れます。ですから今も世界のどこかで絶えることなく戦争や紛争が起きているのです。終戦から80年も戦争を経験せずにすんでいる日本も、この先はどうなるかわかりません。戦争に巻き込まれる可能性は絶無ではないのです。

しかし、それを日常気にしていてもどうにもなりません。心の片隅に留めておく程度でいいと思います。戦争に限らず、生きていればいろいろなことに出合います。もしも何か身の上に悪いことが起きても絶望するのではなく、起きている現実をしっかりと受け止めて対処法を考え、力強く生きていかれることを願っております。

井上さんの物語

Story of My Life

「人に喜ばれる仕事なのだからよそ見せずに続けなさい」
その言葉は、私の励みになりました



家族を養うために、父と同じあん摩の仕事を始めた井上さんには、忘れられない言葉があるそうです。

「同じ町内に住んでいて、ほぼ毎日あん摩の依頼をしてこられた方がいました。その方の奥さんからも時々あん摩を頼まれていたのですが、ある時、その奥さんに『あなたは若いからもっといい仕事に就きたいと思うことがあると思うの。うちのお父さん、口数が少ないから言わないと思うけど、あなたに揉んでもらうのをとっても喜んでいるのよ。あなたの仕事は人に喜ばれる良いお仕事なのだから、よそ見せずにこのお仕事を続けなさいね』と言われました。この言葉は私の心に深く沁み入り、ひとときも忘れることはありませんでした。私が卒業した高校は有数の進学校。同級生は大学を終えて世間に出ると、ほぼ全員が一斉に出世街道をまい進、でも彼らをうらやむことなく、一途に自分の仕事に励み、結果幸せな人生を送ることができました。若いときに私に掛けてくださった、あの奥さんの言葉があったからこそです」

interview

可児 忍 さん

撮影場所 ● **港区のご自宅**

今も毎晩1時間ほど、発明のアイデアを練っている。

インタビュアー 清水亜桜（しみず・あお）さん

インタビュアー 片山萌花（かたやま・もか）さん

インタビュアー 大橋樹亜良（おおはし・きあら）さん

負けることを予想していた軍の内部
豊富に蓄えられていた物資を
将校たちは要領よく持ち帰っていった

豊かな水の恵みに育まれた少年が見た東京は、路面電車（市電・都電）が縦横に走る華やかな街でした。勝ち戦に乗って、神輿（みこし）を担ぎ出す大人たちにつられ、どうせならアメリカ本土まで攻撃すれば良かったのにとまで思った可児さんは、やがて陸軍に入り、戦争の現実を知ることになります。真っ赤に焼けた空を大編隊のB29が飛ぶのを見上げ、水に重なった遺体を見つめる過酷な状況と、蓄えられた軍の物資を持ち去っていく将校たち。焼け野原の東京で、防空壕跡のバラックで暮らしながら、可児さんはものづくりを始めるのです。

戦争体験者 **可児 忍**（かに・しのぶ）さん（101歳）

大正13(1924)年、千葉県の佐原町(現・香取市)生まれ。利根川の水郷地帯で育ち、15歳で東京へ。三田の工場で働きながら、定時制の学校へ通う。兵役を1年半猶予された後、昭和19(1944)年に召集され、陸軍造兵廠（ぞうへいしょう）に配属となり、技能兵として、各種の工場へ派遣。陸軍機甲整備学校で無線や機械工学を学び直してから、昭和電工川崎工場へ派遣され、当地で空襲に遭う。戦後は、金属加工の製作所(現・株式会社可児工業所)を起業し、ものづくりに長く携わりながら技術開発も行い、多くの特許・実用新案を取得している。

どこへ行くにも舟を使う おかずが足りないときは フナを釣って焼けばいい

清水 ―― 千葉の佐原でお生まれだそうですね。

可児 ―― 利根川沿いにある、十六島の長島村（現・香取市）。網の目のような水路に囲まれた、その名の通り島のような水郷です。米どころですが、あまり農地に適したところではなかったらしく、400年ほど前、先祖が苦労をしながら原野を耕し、新田開発をしてくれたようです。

清水 ―― どのような暮らしだったのですか？

可児 ―― 舟が生活の足でしてね、どこへ行くにも舟を使う。だから橋が架かるまでは、何かと不便だったかもしれません。でも、その頃は水郷観光がずいぶん人気を集めたようで、400人ぐらい乗れる汽船が、佐原と潮来を行き来していました。

川の恵みもたっぷりで、おかずが足りないときは、ちょっとフナを釣って焼いて食べたり、200メートルもある長い仕掛けでウナギを捕って、1匹15銭ほどで川魚問屋に買ってもらったりしたものです。

清水 ―― 遊び場も、やはり川だったのでしょうね。

可児 ―― 利根川では、よく泳いだものです。流域は醤油づくりが盛んで、その木樽を長い縄で結んで川に浮かべると、ちょうどコースロープのようになるわけです。泳いで疲れたら、これにつかまって休んでまた泳ぎだす。季節によっては、椿や桃なんかの花が川上から漂ってきて、それはきれいなものでした。

大きな汽船が来ると、その下を潜って船の向こう側へ抜けるという度胸試しのようなこともやりましたね。スクリューに巻き込まれたらたいへんですから、すごく危ない遊びです。だから、まだ小さい頃なんかは、船の近くまでは行くものの、川底にある大きな石に必死にしがみついているだけで、精いっぱいでした。

そういえば、私が小学5年の時にようやく大きな橋が架かったんですが、同じ年の大雪の日、二・二六事件が起き、大人たちが「東京で大変なことが起こったらしい」と話していたのを覚えています。

小学校を卒業し、地元の学校で1年ほど農業を学びましたが、気持ちが変わって、東京へ行くことになりました。

利根川水系には多くの航路が設けられ、水郷遊覧船が行き交いした。「さつき丸」は大型船で、〈水郷の女王〉を自称。もう1隻の「あやめ丸」は、船首に多層式の華やかな遊覧席を備えていた（所蔵：千葉県立中央博物館大利根分館）

真珠湾攻撃の戦果に 大人たちはお神輿を担ぎ出した

片山 ―― 東京に越されたのは、いつ頃でしたか？

可児 ―― 慶應義塾の職員をしていた叔父の勧めで、15歳の時に東京へ来ました。その頃の三田には、馬車や牛車、人力車などが行き来していて、五反田へ向かう坂には、車を押してお金を稼ぐ人足もいましたよ。市電も走っていて、慶應の前がちょうど終点。当時の市電はね、一度切符を買うと、乗り換え券のようなもので、渋谷、新橋、赤坂といった具合に違う路線へも乗り継げたんですよ。

母方の祖父が、三田四国町（現・港区芝2～5丁目）に住んでいたので、そこで暮らしながら、祖父の知り合いが営む工場で働き始めました。

片山 ―― どんな仕事だったのでしょう？

可児 ―― 軍が使う航空用無線機の躯体加工や外装などを、日立や日本電気などから請けていましたね。とても忙しく、100人ぐらい働いていたのかな。私はまだ手伝いぐらいでしたが、夕方5時まで働いた後、蒲田にある定時制の学校へ通っていました。銃の撃ち方も教わりましたね。

大橋 ―― 太平洋戦争が始まる頃の街の様子はどうでしたか？

可児 ―― 始まる前年に、皇紀二千六百年（神話に基づく日本建国の周年）を祝う催しがあった

んですが、花電車（飾りつけた電車）や提灯行列などで大変な盛り上がりでした。

開戦を知ったのは17歳の時。働いていた工場で聞きました。大人たちは浮かれて、町内のお神輿を担いで皇居まで繰り出していきました。私は、あまり実感がなかったんですよ、満州事変や盧溝橋事件がすでにありましたから。ただ、真珠湾の戦果はすごかったので、どうせならアメリカ本土まで攻撃すれば良かったのに、なんて思ってもいました。今思えばひどい話ですが、そんな戦勝ムードでしたし、反対できる時代でもなかった。

大橋 ―― 可児さんも、軍へ入られたのですか？

可児 ―― 会社が延期願いを出してくれたおかげで、しばらく猶予してもらえましたが、いざ令状が届けば、応じないわけにはいきません。街から若者がどんどんいなくなっていましたよ。

大橋 ―― どこに配属されたんですか？

可児 ―― 幸い戦地ではなく、兵器や弾薬、機材、燃料などの製造・補給をする、陸軍の東京造兵廠でした。現在の北区や板橋区にまたがる、広大な敷地です。工場で技術的なことをやっていたので、技能兵として見こまれたんでしょうか、いくつかの工場へ派遣されました。王子の印刷工場では、軍票（軍が発行する代用紙幣）の製紙や印刷などにも携わりましたが、軍需に指定された王子製紙だったのかもしれません。

戦争末期になっても、造兵廠には食糧がたくさんあり、食べることには困りませんでしたが、一歩外に出れば、飢えで苦しむ人が大勢いるわけです。その差がなんとも不思議で、現実とは思えなかったですね。

昭和19（1944）年の秋に、あるいは翌年の春だったかもしれませんが、陸軍機甲整備学校に入学しました。

大橋 ―― 造兵廠から学校へ行かれたんですか？

可児 ―― 神奈川の淵野辺にあり、戦車や装甲車の整備などを学ぶ、技術学校のようなところです。ちゃんと技術を学び直してこい、ということだったのかもしれません。起床後すぐ朝礼と訓練があり、午後は実地で技術を磨き、夜は10時まで勉強と、びっしり詰め込まれます。無線や機械工学を学びましたが、理論学習が多いので、ついていくのがたいへんでした。しかし、3カ月ほどで、今度は川崎へ派遣されることになります。もう空襲がかなりひどくなっていました。

スコールのような焼夷弾 兵器というより恐ろしい生き物のようだった

清水 ―― 空襲は始まっていたんですか？

可児 ―― 造兵廠へ入った頃は、まだ始まっていなかったように思います。ただ、その少し前だったかな、米軍の双発機が上空を飛んでいるのを見たんですよ。それからしばらくして、空襲が始まりましたから、あれは偵察機だったのかもしれない。

清水 ―― 川崎では、どんなところへ行かれたのですか？

可児 ―― 扇島にある昭和電工です。本来は肥料を作る工場ですが、その原料である硝酸とかアンモニアとかは、火薬の原料でもあるから、軍事に転用できるわけです。国産技術で初めてアンモニア合成に成功した工場でもあり、重要な拠点だったんですよ。

清水 ―― 空襲は、そこで体験されたのですか？

可児 ―― 3月10日に下町を襲った、いわゆる東京大空襲は、川崎から見ました。東の空が真っ赤になって、大編隊のB29が黒いシルエットで飛び去っていきましたね。それからも、何度か空襲がありましたが、とくに4月15日の空襲（現在の品川区や大田区が被害を受けた城南大空襲）では、川崎も大きな被害を受けました（川崎大空襲）。防空壕の上にも、焼夷弾がスコールのように降ってきて、屋根や壁へめり込むように付着するんです。ほうきやハタキの柄の先に縄を何本もくくりつけて、付着した焼夷弾を払い落とそうとしても、とてもおっつかない。そのうち焦げたような異様な臭いを発しながら、油

昭和電工川崎工場本事務所（国登録有形文化財／提供：株式会社レゾナック川崎事業所）。昭和6（1931）年に建てられた、昭和初期の工場事務所建築の代表的な様式で、内部には、吹き抜けの階段やステンドグラスなどの意匠が施されている

コラム6 ● 東京造兵廠（とうきょうぞうへいしょう）

陸軍の武器や弾薬、通信機などの製造を担う軍事拠点であるとともに、機材、燃料、食料、衣料などの調達や補給などを担う物流拠点で、十条、板橋から赤羽や王子へ広がる施設群でした。可児さんが配属されたのは、十条側にある東京第一造兵廠で、赤羽線（現・埼京線）を挟んだ板橋側には、第二造兵廠が置かれていました。工場や倉庫が並ぶ広大な敷地には、電気で動くトロッコのレールが敷かれ、赤羽線を跨いで第一や第二の施設を結んでいたそうです。戦後に占領軍に接収され、返還されてからは、十条側は北区の公園や図書館、自衛隊の駐屯地など、板橋側は東京家政大学や帝京大学などに利用されています。

東京第一陸軍造兵廠 旧275号棟は、北区の中央図書館として保存・活用されている（提供：北区立中央図書館）

脂が噴き出し爆発するんです。兵器というより、恐ろしい生き物のようでしたね。

清水 ―― **被害は大きかったのでしょうか。**

可児 ―― 炎から逃げ惑う人たちが、川や運河で大勢亡くなりました。水に飛び込めば助かるのではと、どんどん飛び込むけれど、水も熱くなってしまっていて、下へ押し込められた人から亡くなってしまう。水の中で遺体が折り重なっていました。しばらくすると、遺体がボロボロになってしまい、骨だけでも何とか引き上げられればという状況で、とにかく悲惨でした。

片山 ―― **終戦はどこで迎えられたのですか？**

可児 ―― 降伏のラジオ放送は、造兵廠で聞きました。でも悲壮感はまったくなかった。そうなることは、みんな予想していましたから。お酒が山ほどあったので、「これでようやくうちに帰れるんだ」と、みんなで飲んで騒いで喜びました。

片山 ―― **陸軍は、負けることを知っていたのですか？**

可児 ―― 造兵廠には、戦争のいろんな情報が早くから集まってくるんです。そもそも兵力が比べものにならず、兵士も国民も大事にされず、みんな飢えに苦しんでいた。とても勝てるはずのない戦争なんか、しちゃいけなかったんです。将校たちは、造兵廠に蓄えられていた豊富な軍の物資を、要領よく故郷に持って帰っていきましたよ。

片山 ―― **どのような物資が蓄えられていたんですか？**

可児 ―― いろんな食糧や酒、衣服や帽子、履物といった、軍隊に必要なものがすべてありました。お米は俵だったから、重くて誰も持っていかなかったけど。貴金属、とくに金（きん）もありましたね。通信機の接点なんかに使うんですが、巨大なインゴットでプールのようなところに沈めてあったんですよ。あれは、どうなったのかな。

可児さんが発明した朝・昼・晩に分けて服用する薬が、セットした時間に出てくる抽斗（ひきだし）

パッケージからアルミフィルムなしできれいに抜き出せる、錠剤取り出し器

余った軍用の製品をどう活かす？ 友人たちとのネットワークが動き出した

片山 ―― **除隊後は、どうされましたか？**

可児 ―― 真っ先に佐原へ帰りました。実家の蔵にはお米がたくさんあったから、腹いっぱい食べました。東京に戻ると、焼け野原で住む家がないなか、防空壕を改造したバラックで、友人と2年ほど生活したんです。梅雨には雨が中へ流れ込み、それは大変でしたけど。食べるものがなければ、空腹をしのぐために2～3日寝て過ごしたり、闇市で何か手に入れたり。私だけなら、田舎に帰れば食べられるんですよ。でも、みんなと助け合うことの方が大事だった。そんな時に、東芝にいた友人から「蛍光灯が大量に余ってるんだけど」と声をかけられたんです。

片山 ―― **その頃、もう蛍光灯があったのですか？**

可児 ―― 海軍では使われていたんですよ。戦前に東芝が開発していたんですが、軍での利用が中心だったため、戦争が終わると在庫が大量に残ってしまった。でも、一般の家庭には蛍光灯なんてほとんど普及していなかったし、まだ混乱期で、大企業も売り出す体制をちゃんと整え直せていなかったんですよ。

そこで私は、友人たちと協力しながら、ものづくりを始めたわけです。工場や造兵廠での経験や人脈が大きかったですね。蛍光灯だけでは使えないから誰も買わないけど、取り付けるソケットや台座などを作って一緒に売れば、みんな買ってくれる。販売の方は、友人にまかせて、私は作る方に専念しました。

片山 ―― **いろいろ作ってこられたのですね。**

可児 ―― 1950年代になると、テレビ放送が始まりますから、八木アンテナ（テレビアンテナの代表的な方式）の台座を手がけたり、

コラム7 ● 八木アンテナ（八木・宇田アンテナ）

テレビ受信用に世界中で普及したアンテナの方式。大正13(1924)年に、東北帝国大学(現・東北大学)の八木秀次（やぎひでつぐ）博士と宇田新太郎（うだしんたろう）博士によって発明されました。周辺の建物や木々の影響を受けにくい、強い指向性(電波の強さが方向により異なる性質)に特徴があります。日本では評価が遅れますが、その性能に着目した欧米では軍事研究が進み、とくにレーダー開発に応用されて、日本へ大きな損害を与えることになりました。シンガポールのイギリス軍基地のレーダーにその技術が使われていたのに、占領した側の日本の技術将校が資料に頻出する“YAGI”の意味を知らなかったり、広島・長崎へ投下された原子爆弾に、このアンテナが装備されていたりといった皮肉な逸話は、よく知られています。

オートバイやスクーターが普及しだしたら、ホンダのオートバイのブレーキや燃料のパイプを作ったり。それぞれの時代に合わせて工夫を重ね、技術を磨きながら、何とか波をつかんできたんです。

片山 ―― そういえば、特許や実用新案もいくつかお持ちですね。

可児 ―― アイデアを練るのが好きなんでしょうね。92歳の時に、生きるか死ぬかというような大手術もしましたが、それからも新たな特許を3つ取りました。今も、布団に入って1時間ぐらい考えながら、いつの間にか寝入ってるなんてことを、毎晩やってるんですよ。

可児さんからのメッセージ

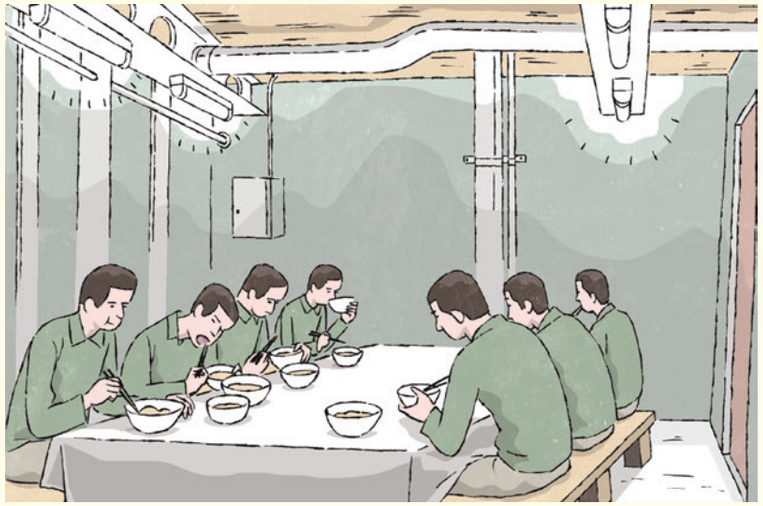
あの時代の若者は、「お国のために」といって兵隊に志願するのが当たり前でした。自らそう思い込むように教育を受けていた、ともいえますが、いざ身近な人と別れなければならなくなれば、必ず葛藤があったはずです。心の底から喜んで戦争に行った人など、いなかったでしょう。戦地に行かずにすんだ私でさえあんなにつらかったんですから、実際に戦地に行った人は、どれほど過酷でつらい目に遭い、悲惨な思いをしたことかと胸が痛くなります。

今も、世界のあちこちで戦争が起きていますが、最初から戦争をしようなんて誰も考えていないはずです。平和な環境で将来の絵を描き、好きな仕事をして、家族を持って、幸せに生きていくことを望んでいる。それなのにどうして戦争が起きてしまうのか、若い人には、しっかり考えてみてほしいですね。

可児さんの物語

Story of My Life

軍の技術が先を行ってた戦時中
民間技術がリードする新しい時代に自分も関わることができた



竹やりやバケツリレーなど、精神力が強調された戦時下の日本でしたが、一方で、軍の技術力は先進的だったと可児さんは語ります。

「海軍ではすでに蛍光灯が使われていた、という話をしましたね。これは、電球より少ない電力で多くの明るさが得られる蛍光灯が、エネルギー消費をできるだけ抑えたい軍艦では、とても助かるからです。艦内での飛行機の昇降や、弾薬の温度管理のために、エレベーターや冷房などが備えられたり、直火を使わない調理器や、センサーのような機器も開発されたり。食料保存のための冷蔵庫もあって、アイスクリームを食べられる艦さえあったようです。こういった先進技術が、一般の家庭でも使われるようになるのは、それから十数年ほども経ってから。軍の技術がずっと先を行ってた時代だったわけですが、でも、その後に始まる民間技術がリードしていく時代に、自分たちも関われたことは、私の誇りかもしれません」